

平成23年度 豊田市郷土資料館企画展

愛知県埋蔵文化財センター埋蔵文化財展

ケヤキが語る二千年

「弥生・古墳時代の木の文化」



ケヤじい

はじめに

プラスチック製品が急速に普及する一九六〇年代より以前には、私たちの生活に関わる、ありとあらゆる分野に木製品が使われていました。これら木の道具は、用途によって使われる木の種類が異なっています。このように適材適所の木材利用は、今から二千年以上前の弥生時代には既に完成されており、まさに『日本文化Ⅱ木の文化』といわれる所以となっています。

また、人の手が加わった、いわゆる里山も弥生時代にできあがりしました。そして、この里山を維持・管理することによって日常の生活材や燃料材を得ることができ、ひいては継続可能で安定した社会（生活）を営むことができるようになったのです。

愛知県埋蔵文化財センターでは、これまで朝日遺跡をはじめとする数多くの遺跡で、大量の木製品を発掘調査し、その保存処理を行ってきました。これらの木製品には、原木・各種未成品から完成品まで、まさに木の文化を示す多種多様なものが認められます。

本展覧会では、主に弥生・古墳時代の木製品を通じて、当時の人々と木の関わり、そして、これからの社会のあり方についても考えてみたいと思います。

平成二十四年一月

豊田市教育委員会

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県教育委員会

目次

| | |
|-----|----------------------|
| 第1章 | 森と人のかかわり・・・・・・・・・・一 |
| 第2章 | 弥生の匠たち・・・・・・・・・・三 |
| 第3章 | 地域の開発と米づくり・・・・・・・・七 |
| 第4章 | 衣食住の木製品・・・・・・・・・・十一 |
| 第5章 | ハレの日の木製品・・・・・・・・・・十五 |
| 第6章 | これ何だろう？・・・・・・・・・・十八 |
| 第7章 | 未来に残す・・・・・・・・・・十九 |

例言

一、本書は平成二十四年一月二十八日から三月四日まで開催する豊田市郷土資料館企画展・愛知県埋蔵文化財センター埋蔵文化財展「ケヤキが語る二千年」の解説書である。

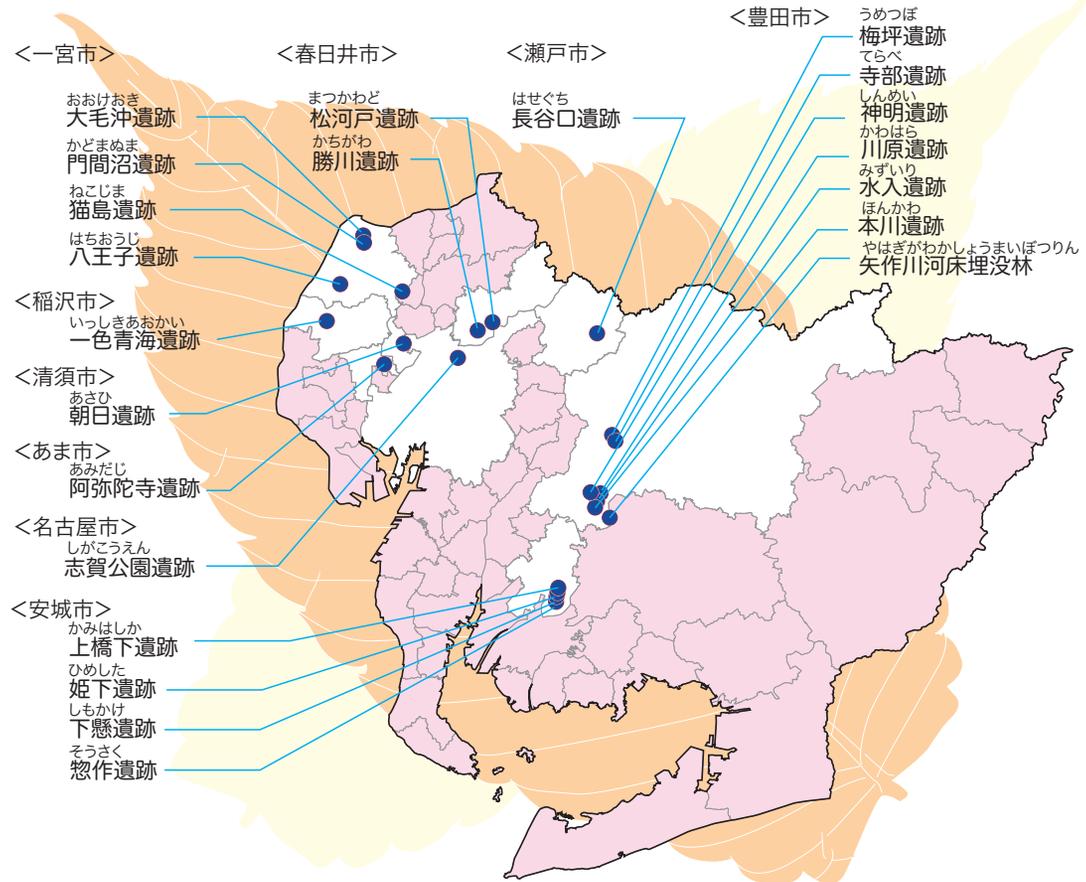
二、本企画展の開催にあたり、以下の方々よりご協力を賜りました。記して感謝いたします（敬称略）。

安城市埋蔵文化財センター・一宮市博物館・伊那谷総合治山事業所・春日井市教育委員会・森林交流館・名古屋市環境局環境企画課・名古屋市長政土木局・伊藤基之・植田弥生・小川充・梶誠・川崎みどり・川島正二・久保禎子・下出至子・華井京子・牧野由佳・松本彩・水野拓郎・村松一秀・山田昌久

三、本書の執筆は樋上昇が、編集は堀木真美子が行った。



展示に関わる遺跡の位置



森と人とのかわり

ワシは昔々、豊田
おしかも
の鴛鴦むらに暮ら
しておったケヤキ
の精霊せいれいじゃ。そう
じゃな、ケヤじい
とでも呼んでくれ。
しばらくワシの昔
ばなしにつきあつ
てくれるかのう。

ワシが生きてお
ったのは、今から
千五百年ほども前
のことじゃ。近く



▲矢作川河床埋没林の立ち株 (クリ)



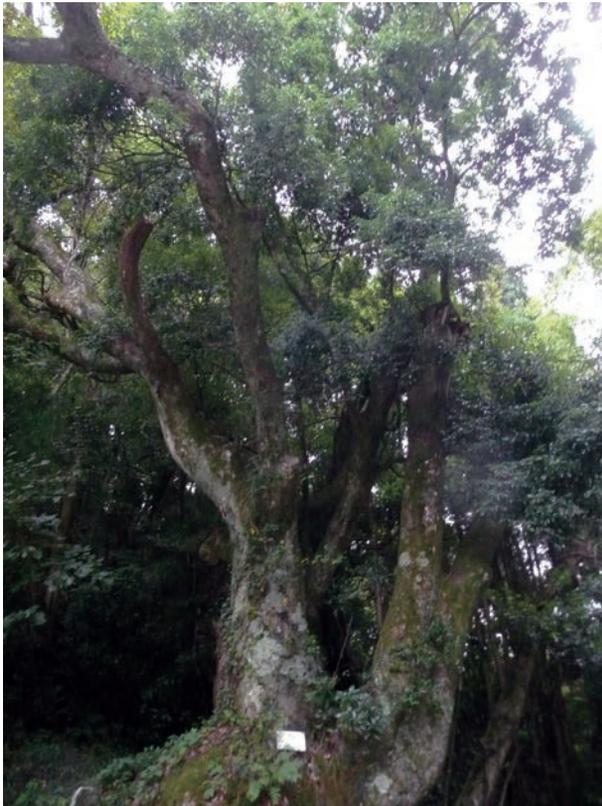
▲御作のケヤキ



のじゃの。
度会ってみたいも
ておるそうじゃ。一
今も元気に暮らし
いのケヤキたちが、
年格好が同じくら
ていくと、ワシと

の？
みんな、ここにお
るワシの仲間たち
の名前がわかるか

には大きな川が流
れておっての。むら
のそばには、それは
それは豊かな森が
あって、ワシの仲間
もいっぱいおった。



▲押井のケヤキ



▲花沢のケヤキ

弥生の匠たち

ワシのじいさんから聞いた話じゃがのう。ある日のこと、このあたりにも人が現れた。ワシらの仲間を伐り払ってむらを聞いたのじゃ。

彼らは、はじめのうち石の斧でエッチラオッチラと伐っておったそうじゃ。悠長なことじゃの。

ところが、ワシのおやじの代には黒い鉄の斧を使いだした。そうすると、あたりの木はアツという間に伐り倒されていったのじゃ。

むらの人たちは、伐ったワシらの仲間を輪切りにし、さらに斧とクサビで縦に割って、板を作った。そして板からいろんなものを作っていったのじゃ。



▲伐採用石斧（一色青海遺跡）



▲伐採用石斧柄（朝日遺跡）



▲加工用石斧柄未成品（朝日遺跡）



▲加工用石斧（一色青海遺跡）



ケヤじい



▲石斧による伐採

彼らの仕事ぶりは見事なものじゃった。見ておると、どうやら木の種類や大きさによって作るものを変えているらしかった。ワシと同じケヤキたちは、きれいなウツワに姿を変えていった。カシやコナラたちは土を掘り返すクワやスキになっ
ていったし、大きなクスノキは白うすになった。杵きねはツバキじゃった。



▲クサビで割る途中に放棄された丸太（下懸遺跡）



▲クサビ（朝日遺跡）

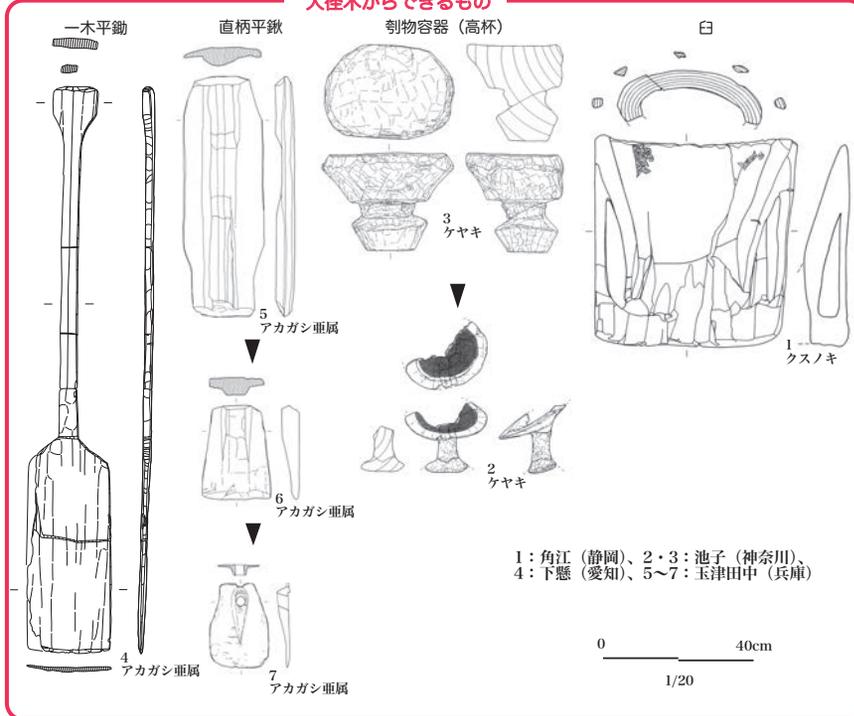


▲鉄斧（長谷口遺跡）



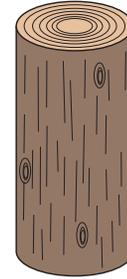
▲鉄斧の柄（惣作遺跡）

大径木からできるもの



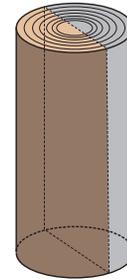
1: 角江 (静岡)、2・3: 池子 (神奈川)、
4: 下懸 (愛知)、5~7: 玉津田中 (兵庫)

取さめ
柱目材を採るための製材法



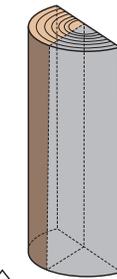
1. 直径20cm以上の
中・大径木より長さ
1~3mほどの丸太
を切り出す(この段
階で水漬けして乾
燥させる)

白・柱材
などへ



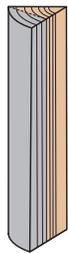
2. 丸太を^{くさび}筋で縦に
2つに割る

そう たかつき
容器(槽・高杯)
などへ



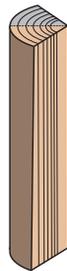
3. 二分割した丸太を
さらに2つに割る

たてぎね たいぎねのえ
縦杵・縦斧柄・ヨコツチ・
容器・柱材などへ



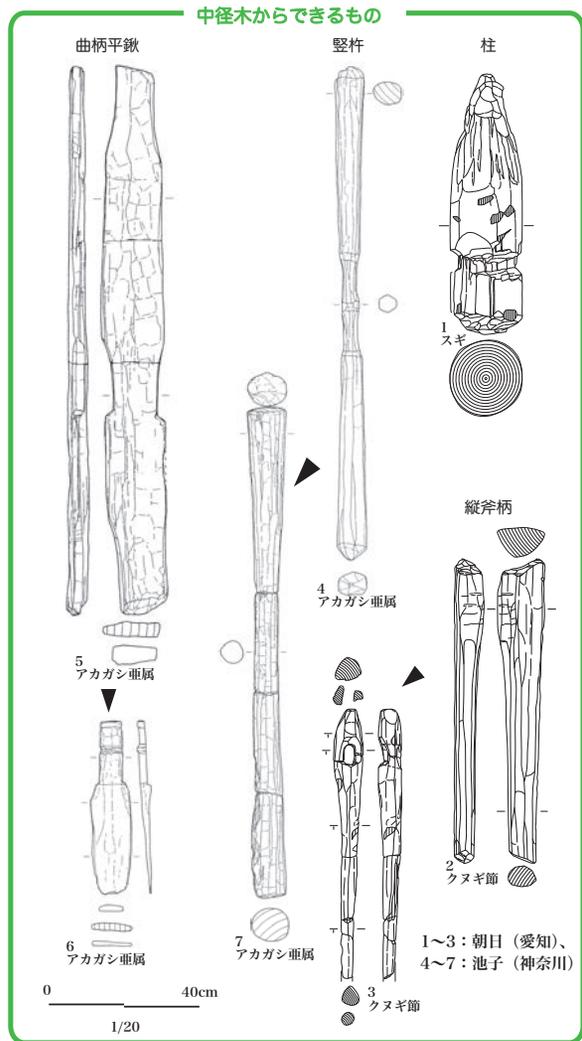
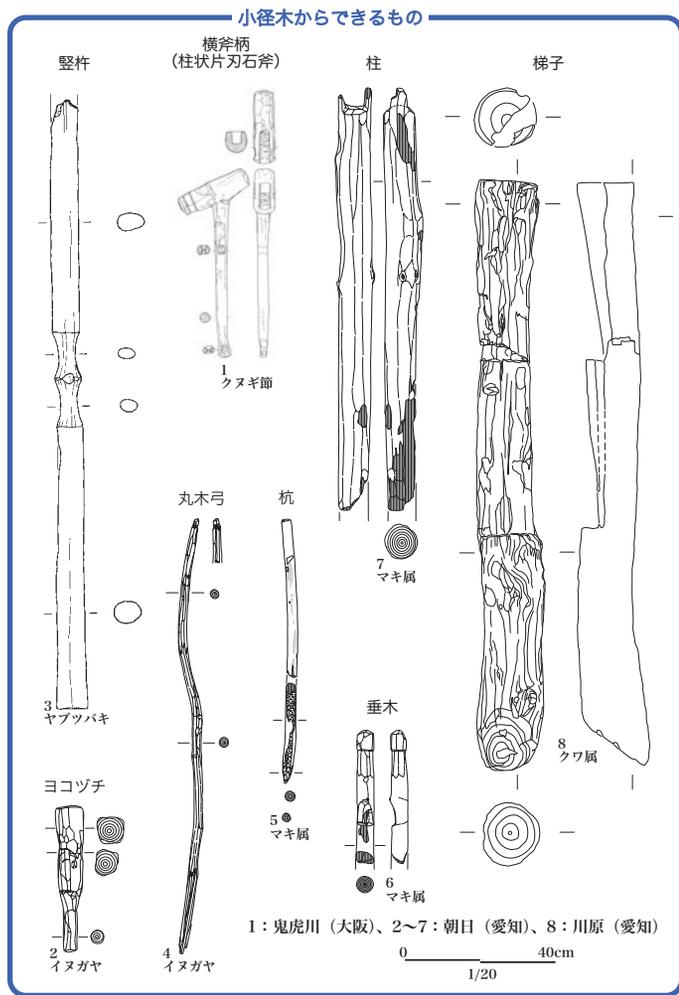
5. 木の外側を斜め
に削り取る

くわ ひらすき
連続製作の鋤、一木平鋤、
床・壁・扉材などへ



4. 四分割した丸太を
さらに2つに割る

原材として
他の集落へ搬出
はんしゆつ



▲大・中・小径木とそれからできる木製品 (樋上 2010 より転載)

地域の開発と米づくり

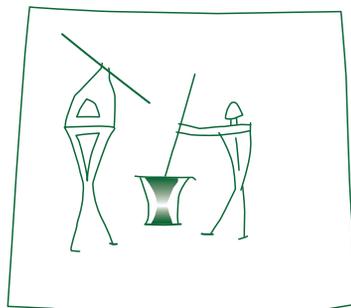
むらの人たちは、ワシの仲間を伐り払ったあと、クワやスキを使って耕しはじめたのじゃ。地面を平らにならして川から水を引き、アゼを作って池のように水をためた。彼らの話を盗み聞きしておると、どうやら田んぼと呼ぶらしい。うらかな春のある日、そこになにやら青い草を植えた。なんでも、遠い遠い海の向こうから伝わってきたものだそうじゃ。

彼らは毎日毎日、それは熱心に世話をしておった。植えてから半年ほどたち秋になると、草の先っぽに金色に輝く穂が実ったのじゃ。それをひとつひとつ丁寧に摘み取って白に入れ、杵でトントンとつきはじめた。するとカラがとれて、真っ白な粒になった。お米というらしい。

土を焼いて作った大きな土器に水と一緒にに入れて、火でグツグツと煮ると、あたり一面にはいい香りがただよったものじゃった。



▲たてきね 堅杵 (志賀公園遺跡)



ケヤじい



▲うす 白 (川原遺跡)



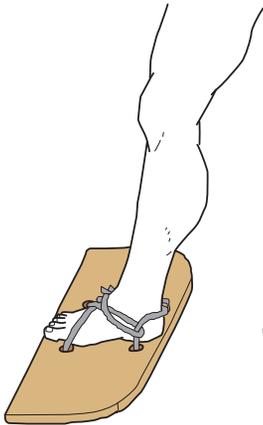
鎌の柄 (志賀公園遺跡)



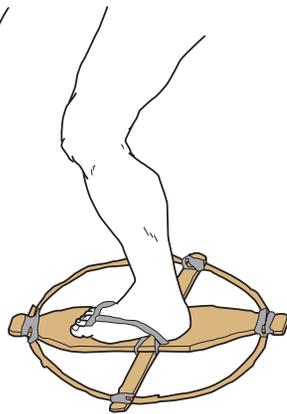
一木平鋤 (志賀公園遺跡)



大足 (寺部遺跡)

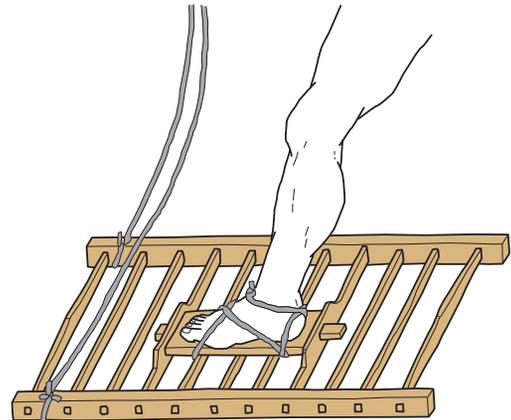


1: 棒なし形式



2: 円形枠付き形式

▲田下駄の使用例 (秋山 1993 より転載)



3: 方形枠付き形式 (大足)

クワも、ワシのおやじの頃までは、全部木でできているらしかった。でもワシの代になってから、木のクワにも鉄の刃先をつけだした。すると、これまで彼らが難儀なんびしておった山の中にまで手をつけはじめたのじゃ。

木を伐ったあとの山に火を放って灰をつくり、鉄の刃先をつけたクワで耕し、種をまいてヒエ・アワ・ソバ・マメなんかを作っておった。焼畑というらしい。でも何年かたつと、そのままほったらかして、別の場所を耕しておった。三十年ほどたつと、焼畑のあとはキレイに元の森へと戻っていったのじゃ。

どうやら、むらの人たちは、ワシらを痛めつけるだけじゃなくて、育ててくれておったらしいのう。おかげでワシらもキクイムシにやられず生きていったのじゃ。



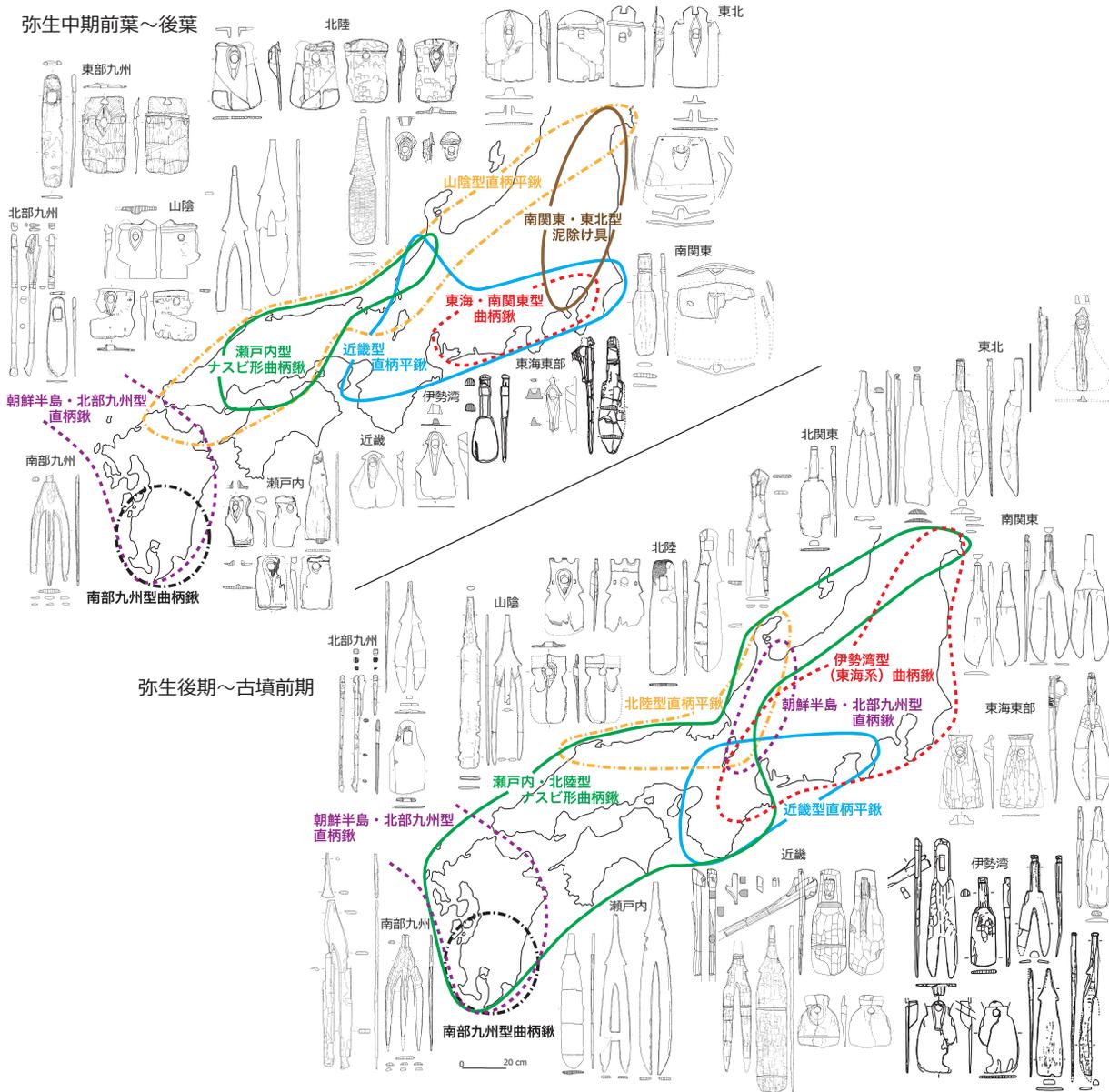
▲伊勢湾型曲柄鋏まがりまぐわ（勝川遺跡）



▲泥よけ具（朝日遺跡）



▲近畿型直柄平鋏なおまひらぐわ（八王子遺跡）

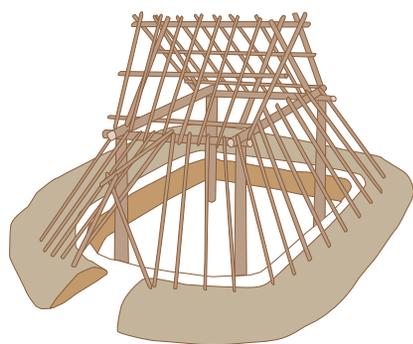


▲鉞の地域分布の変遷 (樋上 2010 より転載)

衣食住の木製品

むらの人たちはワシらを伐って、いろんなものを作っておったのじゃ。家はコナラやクリの丸太を柱と桁にし、イヌマキを屋根の下地に使って、その上にカヤで屋根を葺いておった。

むらのなかには、ひときわ大きな建物が建っておった。なんでも、収穫した米を納めておくものらしい。柱は家の数倍の太さがあったのう。屋根にもいろんな飾りがつけてあったわい。床が高くしてあるのは、ネズミなんぞに米を食われないための工夫じゃったらしい。よく考えるものよのう。



▲たてあな
縦穴住居の構造



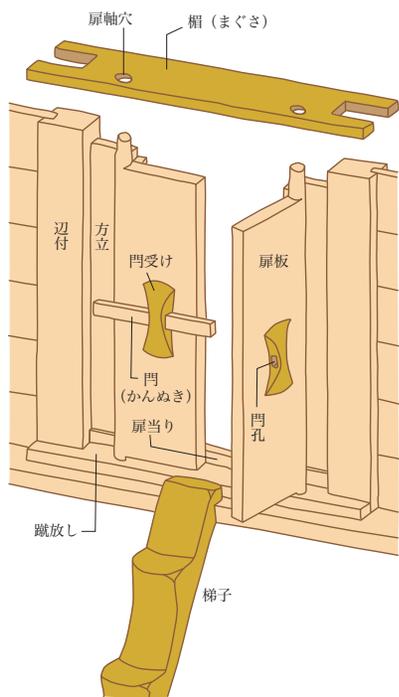
▲あるムラの風景



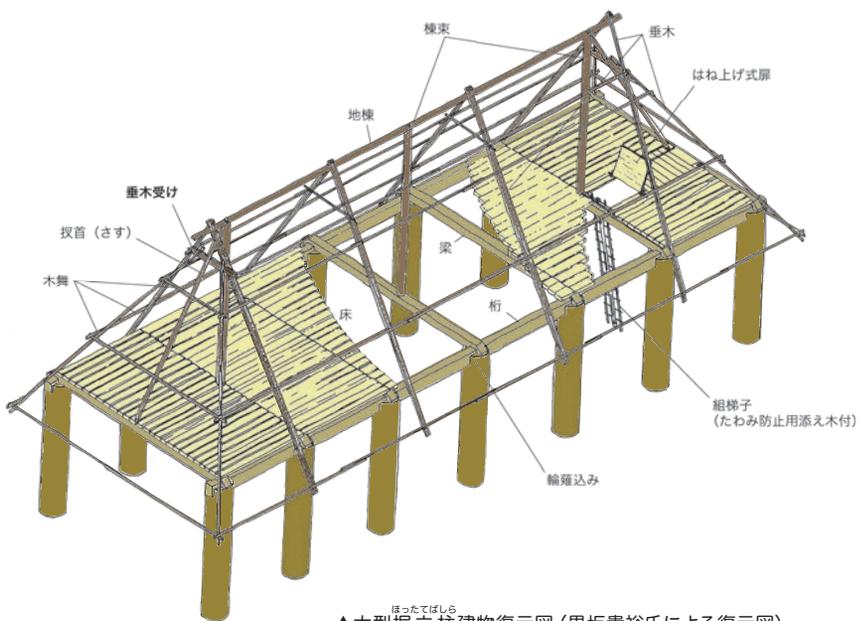
ケヤじい



▲まぐさ(上橋下遺跡)



▲高床建物の入口構造



▲大型掘立柱建物復元図(黒坂貴裕氏による復元図)

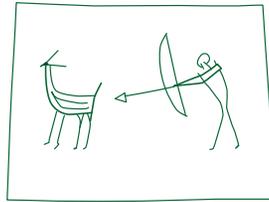


▲大型掘立柱建物の跡(一色青海遺跡)

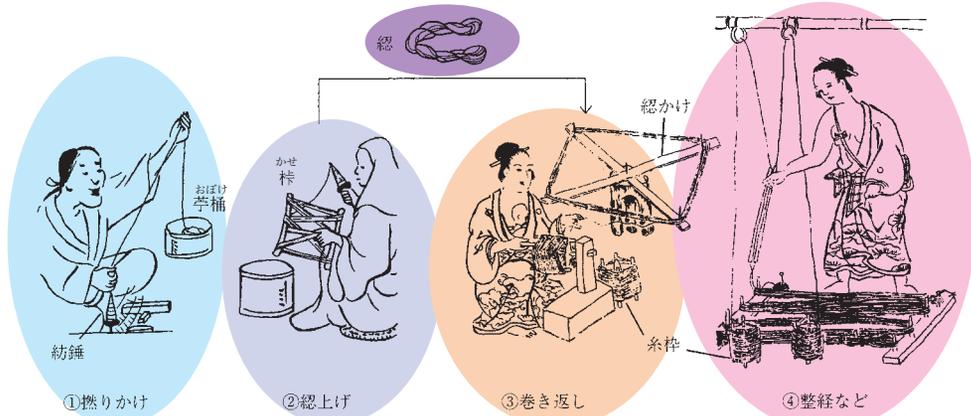
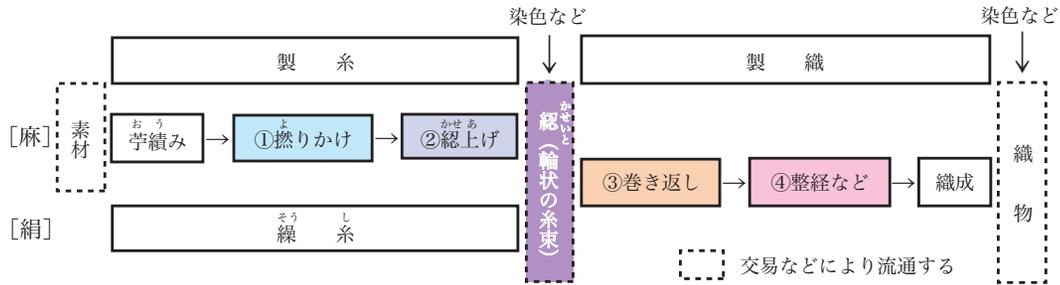


▲大型建物の柱(下懸遺跡)

そういうえば、むらの女たちはヒマがあるとき集まって、にぎやかにしゃべりながら糸を紡ぎ、機織り機で布を織っていった。機織り機はたくさんある部品を組み合わせたから、バラバラになると、なんだかよくわからないのう。



秋になって米が実る頃には、よそのむらとの争いごとがよくおこった。むらによつては、イナゴにやられて食べるものがなくなるが多かったからだの



(出典 ①「信貴山縁起」 ②「春日権現験記絵」 ③④「越能山都登」)

▲繊維から布へ(東村 2011 より転載)



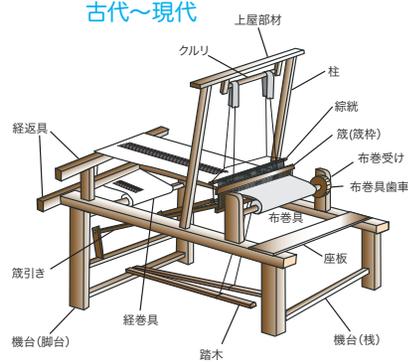
◀古墳時代中期のカマド断ち割り状況 (本川遺跡)

う。男たちは弓矢を
もって、戦いに行っ
ておったわ。弓矢は
ケモノを獲るのにも
使っておったの。

ワシらのむらは、
大きな川がそばにあ
ったおかげで、よそ
からいろんな人が訪
ねてきておった。ど
うやら、舟で川をさ
かのぼってきたらし
い。言葉の通じない、
海の向こうから来た
人もおつての。彼ら
もすぐ近くにむらを
構えたのじゃ。ワシ
らのむらの若者は、
彼らにカマドという
新しい煮炊きの道具
を教えてもらって、
早速自分の家に造っ
ておったわい。いつ
の世も、新しいもの好
きがおるもんじゃの
う。

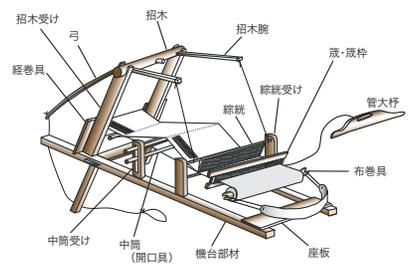
ゆうきだいこていはた
有機台固定機
(機台もち、固定された部材が経糸の緊張を保持する機)

古代～現代



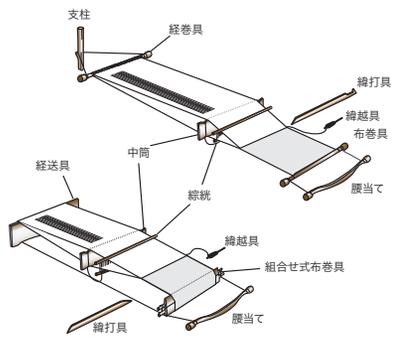
ゆうきだいこしはた
有機台腰機
(機台はもつが、織手が腰を反らせて経糸の緊張を保持する機)

古墳時代～古代



むきだいこしはた
無機台腰機
(機台をもたず、織手が腰を反らせて経糸の緊張を保持する機)

弥生～古墳時代



▲機織り機の変遷 (黒須 2006 より転載)

ハレの日の木製品

むらでは、春と秋に大きなおまつりがあった。春は田植えの前、秋は稲刈りのあとじゃった。

むら長の家がワシのすぐ近くにあったの。むらのまつりは必ずワシのまわりでおこなわれておった。にぎやかじゃったのう。小さな土のウツワをワシの足元にお供えしてくれたり、枝に木で鳥をかたどったものをぶらさげられたこともあったのう。



▲人面のある鳥形木製品（八王子遺跡）



▲合子の蓋（八王子遺跡）



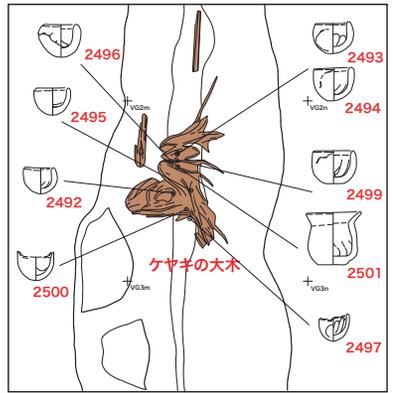
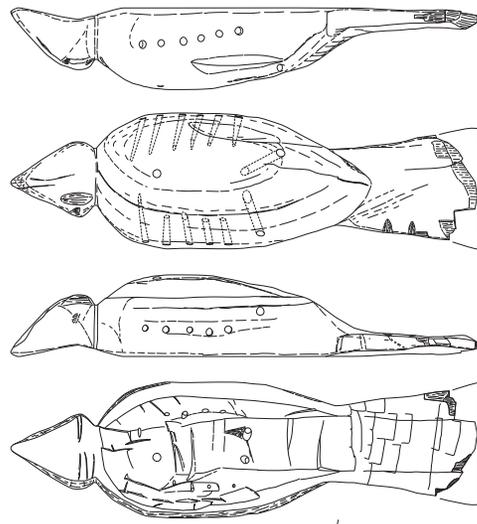
▲土製合子（川原遺跡）



▲鳥形木製品（本川遺跡）



ケヤじい



▲ケヤキ大木とミニチュア土器



▲鳥形木製品・ミニチュア土器の出土位置とケヤキの大木(本川遺跡)



▲武器形木製品 (八王子遺跡)

ある大きなむらでは、木でかたどった武器や舟、きれいな木のウツワをまつりで使うと聞いたこともある。

むらびとの話では、神さまは高い木に降りてこられるらしい。だからワシは伐らずに残されたのか。そういえば、森のなかにもヒノキやスギの高い木が伐られずに残っておったわい。あれも神さまが降りてきて、時には神さまが宿る木だったからなのかのう。



▲団扇の復元図と出土遺物 (惣作遺跡)



▲木製の甲 左：表 右：裏 (下懸遺跡)

これ何だろう？

むらびとたちは何でもワシらで作っておったからのう。
 ずいぶんいろんなモノがあったわい。

ワシの孫やひ孫の代の人たちが見ても、これは何に使っ
 たのかわからんじゃろうのう。
 みんなも、ちよこつと考えてくれんか。



▲半円形のくりこみをもつ木製品 (姫下遺跡)



▲同心円の彫り込みをもつ木製品
(八王子遺跡)



▲4つの四角い窓をもつ円盤状の木製品 (姫下遺跡)



ケヤじい

未来に残す

ワシら木で作ったものはのう、石や土で作ったものと違って、時がたつと、たいていは腐くさってしまうのじゃ。

でも、うまく条件が揃そろうと、のちのちまでも残ることがある。ワシらで作ったものが生き残った時には、カラダのなかに水がいっぱい入っておるんじゃ。

でも、この水気が抜けてしまうと、すっかりかたちが変わってしまうんじゃ。だから掘り出した人たちは、ワシらのかたちが変わってしまわないように、いろんな工夫をしてきた。おかげで、こうしてみんなに見てもらえるようになったのじゃ。

ワシらがもともと生きておった森ものう、すっかり変わってしまった。昔の森は、いろんな種類の木が生えておった。だから、むらびとたちも、木の性質によって、道具を作りわけれることを覚えてたんじゃな。

ところがのう、のちの人たちは、自分たちが使いやすい木ばかり植え始めたんじゃ。そう、スギとヒノキじゃよ。特にスギは育ちが早いから、どんどん植えていったんじゃ。

人が植えた森はのう、きちんと人が手入れをしている間は、素直にスクスクと育つんじゃ。でもものう、ある時から、海の外で育ったワシらの仲間が入って



▲手入れが行き届かず荒れた人工林 (写真:豊田市森林課提供)



▲木製品の保存処理をする機械 (PEG 含浸装置)



ケヤじい

くるようになった。それでのう、人が植えて育ててきた森の手入れを怠るおこたようになったんじゃ。

その結果、どうなったと思う？

人が手入れしていない、荒れ放題の森で育ったスギは、家の柱にも使ってもらえんし、花粉症を引き起こす。地面に保水力がないので、洪水の原因にもなるんじゃ。

ワシらが育ってきた日本の国はのう、知ってのとおり石油がとれん。原子力とやらも危ないことが、あの東日本大震災と大津波で、みんなもよくわかったじゃろう。

これからは、お日さま、風、水、そしてワシら木の出番じゃ。

ここ豊田の地でも、炭窯すみがまでワシらを活用してくださるありがたい人たちががんばっておる。炭で焼いた肉や魚はウマイぞ！薪ストーブも暖かい。木で建てた家は住み心地もいいし、伐ってもらえることでワシらも新たな命をえることができるんじゃ。

人とワシらは、これまでもう何千年、いや、何万年も一緒に暮らしてきたんじゃ。

これからも、よろしくな。

〈〈 図版を引用した文献 〉〉

秋山浩三 一九九三『『大足』の再検討』『考古学研究』四十一―三

黒須亜希子 二〇〇六『はたおりの歴史展』図録 カルチュアはつとり No.8

東村純子 二〇一〇『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房

樋上昇 二〇一〇『木製品から考える地域社会―弥生から古墳へ―』雄山閣



▲野林町の炭窯 (写真：梶 誠氏提供)



▲よく手入れされた人工林 (写真：豊田市森林課提供)

縄文時代

BC
1000年

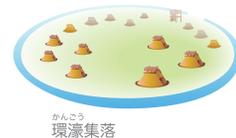
矢作川河床埋没林

松河戸遺跡

BC
400年

弥生時代

朝日遺跡・猫島遺跡・阿弥陀寺遺跡

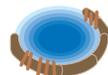


AD1年

上橋下遺跡・勝川遺跡・一色青海遺跡

長谷口遺跡

下懸遺跡



大型建物と泉(八王子遺跡)



山中式土器

200年

やま たい ごとく
邪馬台国

川原遺跡・惣作遺跡・姫下遺跡・八王子遺跡

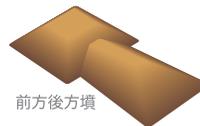


スサジがめ
S字甕

400年

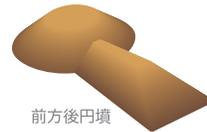
古墳時代

門間沼遺跡



前方後方墳

神明遺跡・本川遺跡・水入遺跡



前方後円墳

寺部遺跡

600年

飛鳥時代

梅坪遺跡・志賀公園遺跡

710年

奈良時代

794年

平安時代

大毛沖遺跡

ケヤキが語る二千年

「弥生・古墳時代の木の文化」
平成二十四年一月二十八日～三月四日

発行日：平成二十四年一月二十八日
発行：愛知県埋蔵文化財センター
製作・編集：愛知県埋蔵文化財センター

平成23年度 豊田市郷土資料館企画展
愛知県埋蔵文化財センター埋蔵文化財展